

## 旅するところ

立教大学 観光学部 教授 橋本 俊哉  
はしもと としや

観光は、社会の動きを反映しながら絶えず変化するために、“時代を映し出す鏡”と呼ばれることがあります。旅する人の“ところ”には、時代を越えて認められる不変の部分が少なくありません。本稿では、私たちはなぜ旅をするのか、なぜ自然に憧れるのかという、旅人がもつ根源的な想いや心理について考えてみましょう。

## ① 人類は旅することで進化してきた

約6万年前にアフリカで誕生したとされる人類（新人）は、ユーラシア大陸から、最終的にはアメリカ大陸の南端までの長い旅を経て、現在に至っています。日本には、およそ3万8,000年前にたどり着いたものとされています。北へ移動した人びとは毛皮を身にまとって寒さに耐え、住む場所を工夫して定住しました。海を移動する術を身につけた人びとは、魚を獲る方法をあみ出して暮らし、南洋の島々に渡っていきました。人は移動しながらそれぞれの土地の環境に適應する努力をし、生き延びてきたのです。

私たちも、地方から都会に出て暮らせば視野が広がり、それまで気づかなかった故郷の良さに気づくものです。外国に旅行して、出会った人たちの生活ぶりや彼らとの交流から、新たなヒントやアイデアを得ることもあるでしょう。世界がいかに知らないことに満ちあふれているのかを知って学び方を工夫するようになったり、今の暮らしがいかに恵まれているかに気づいて生まれ育った日本を見つめ直す契機

にもなります。移動や交流によって眼を見開き、さまざまな刺激をえて思考をめぐらせることで、私たちは進化し、賢くなってきたのです<sup>1)</sup>。

私たちの祖先は、移動しながら生き延びるための環境の適性を見きわめながらも、未開の地を、そして海の彼方にある見知らぬ島々を、自分の眼で見て踏みしめてみたい、という想いに駆られて移動してきたことでしょう。『おくのほそ道』の序文で「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と述べた芭蕉にしても同じです。私たちが初めての海外旅行先に着く際に感じる高揚感も、それに相通じるものでしょう。見知らぬ土地へ行き、実際に体験することは、書物やインターネットを通して得る知識とは別物です。こうした「未知へのあこがれ」や「好奇心」は、時代を越えて人を旅に駆りたてることで、人びとの暮らしや社会を変える原動力となってきたのです。

## ② 「さすらいたい」と「よどみたい」

イギリスの研究者グレイは、人が旅に何を求めるか、その基本的な志向に



図1 月あかりと温泉

イラスト：横山宇加© uka yokoyama

は2つの方向性があると考えました<sup>2)</sup>。ワンダーラスト(Wanderlust)とサンラスト(Sunlust)です。Wanderは“さまよい歩く”、lustは“～を求める”という意味です。ワンダーラストは、「異なる文化に接したり遺跡を訪ねるなど、先に述べたような好奇心にもとづいて知識や見聞を広め、体験しようとするタイプ」です。対して、サンラストは「快適さ・やすらぎなどを求めて、それにふさわしい地に一時的に移動するタイプ」です。これらの志向を実際の旅行形態と照らし合わせてみると、前者が「周遊型」、後者が「滞在型」の旅の形に対応しているといえましょう。つまり人はワンダーラスト＝「さすらいたい」と、サンラスト＝「よどみたい」という2つの志向をもって、個々人でどちらかを好むかということも当然

ありますが、同じ人でも、旅行目的や旅行先によって使い分けながら旅行しているのです。

なお、ここで快適さ、やすらぎを求める場所の象徴として“sun”(=太陽がふりそそぐこと)が用いられているのは、とくに冬場に曇天が続き、ビーチリゾートに憧れるヨーロッパの研究者らしい発想です。日本人の感覚としては、やすらぎ・くつろぎの象徴は太陽よりもむしろ“月あかりと温泉”のほうがしっくりするので、むしろ「ムーンラスト型」と呼ぶほうが、より適切といえるでしょう(図1)。

ムーンラスト型の典型といえる日本の温泉湯治場は、かつて人びとが集う社交の場として賑わいをみせていました<sup>3)</sup>。農閑期にそこに集う人びとは、温泉という“大地の恵み”によって1

年の農作業の疲れをとるとともに、宿の主人や同行者、毎年同じ時期に集う友と語らったり新しい出会いを楽しんだのです。長期滞在をすれば、それだけ多くの人との出会いや交流があります。旅先は日常生活のしがらみとは無縁であることの解放感と相まって、自由な雰囲気の中で楽しみの輪が広がったり、初めて会った人から誘われて知的刺激を受けて創作活動に取り組むようなこともあったでしょう。現代でも、知人に会いに行くことは、人が旅するための目的として重要であることに変わりはありませんし、そうした出会いが期待できる場所に人は集まります。「出会いや交流」も、人が旅に出る大きな魅力要素となっているのです。

### ③ 人を癒す自然のパワー

「旅に出たい」と思いたっても、経済的な条件や時間が確保できるかなどの条件が揃わないと実現しません。行こうと思っていた国で戦争やテロがあれば中止・延期するでしょうし、家族が病気で出かけられないというような、さまざまな条件に左右されます。それでも、「ワールドカップの決勝を見たい」という強い想いがあれば、お金を貯め、時間もやりくりして“0泊3日”で地球の反対側まで行くでしょう。それに対し、いくら時間やお金があっても「旅に出たい」という意思がなければ旅行に出かけようとはしないのですから、やはり「旅に出たい」という本人の意思＝旅行への動機が重要なことがわかります。

時代を越えて認められる基本的な旅行動機には3種類あります。まずは、気分転換をしたい、煩わしさから逃れたいなど、日常生活（のしがらみ）からの一時的解放を求める「緊張解除の動機」です。2つ目は、先ほど紹介したような人びととの出会いや交流です。これには、親睦を深めたい、常識として知っておきたい、皆が行くので一緒に行きたいというような、日常生活での友人・知人との関わりあいも含めた「社会的動機」です。3つ目は最初に述べた未知へのあこがれや好奇心のような、自身の成長や自己実現につながる「自己実現にかかわる動機」です。ただし、人が実際に旅行する理由をみると、これらの動機がクロスオーバーする場合も少なくありません。近年盛んになっている社会貢献やボランティア目的の旅行にしても、関係者の話では、純粹に社会への貢献（自己実現にかかわる動機）というよりも、むしろ人とのつながり（社会的動機）に期待して参加する人が多いといえます。

②で紹介した「さすらいたい」と「よどみたい」という2つの志向との関係では、「さすらいたい」は好奇心を満たすために移動するという自己実現にかかわる動機と、「よどみたい」は滞在型の観光地が人との出会いや交流の場となりやすいという意味で社会的動機と、それぞれ親和性が高いといえるでしょう。

もう一つの緊張解除の動機についてはどうでしょうか。日常生活の煩わしさから一時的に逃れたい、気分転換をしたい人たちは、周遊型・滞在型どち



写真1：散策のあいだに一休み 写真提供：ピクスタ、bee/pixta（ピクスタ）

らの旅行形態もとりうるので、この動機は「さすらいたい」と「よどみたい」という双方の志向に通じるものでしょう。また、本稿の主題とする「自然を求め旅」とも密接な関係にあります。なぜなら、自然とふれあうことが疲労回復を早めたり、緊張解消や気分転換につながるなど、多くのプラスの効果をもたらすことが明らかにされているからです。たとえば、自然を眺めることはストレスを回復するのに役立つし、住まいや職場の窓から自然が見えると、日常生活に満足感を与えたり、仕事の意欲が高まります。人口密度が高くなるにつれ、日帰りハイキングや泊りがけの旅行が増えたり、花や植木、苗木を買うなど、無意識のうちに自然を求める行動が増加することもわかっています<sup>4)</sup>。私自身の研究でも、旅行先での自然散策が、プラスの感情の増進とマイナスの感情の緩和の効果が認めら

れています（写真1）。

#### ④ 遺伝子に組み込まれた？「内なる自然」

ではなぜ、自然が私たちのストレスの解消や気分転換に役立ち、都市化が進むと自然を求めようとするのでしょうか。生態学者の河合雅雄は、人類の歴史を500万年として、そのうち499万年は狩猟生活を送ってきたことから、私たちが緑の中で心がやすまり落ち着くのは、心の内奥からこみあげる生得的なもの指摘しています<sup>5)</sup>。また、海から陸上に進化してきた私たちにとって、海や水辺も大切な存在です。名所絵や山水画などにも水辺は画題として欠かせないものですし、実際のレクリエーションの場としても水辺は重要です。緑や水に近い環境の中で進化してきた私たちは、文明社会の進展に伴う生活環境の急速な変化に、心も体も追いついていないのかもしれない。



写真2 人を惹きつける緑豊かな水辺空間

人口が100万人を超えていたと推定される18世紀初頭の江戸は、当時ヨーロッパ最大の都市ロンドンをしのぐ規模で、とくに長屋暮らしの庶民は驚くほど密集して暮らしていました。しかし社寺が数多くあった江戸は緑地が豊富で、河川敷や海岸も居住地近くにみられたため、四季それぞれに、摘み草、汐干狩、蛍狩、虫聴、月見、紅葉狩、雪見などを楽しんでいました（図2）<sup>6</sup>。



図2 道灌山聴虫乃図

こうした庶民のレクリエーション活動は四季を愛でる文化としてみても興味深いですが、窮屈な長屋暮らしの町人たちにとって、自然に親しむことが格好の気晴らしの機会となっていたという意味で、自然が江戸の活力を生みだす装置としての大切な役割を果たしていたといえましょう。

現代でも、下町の狭い路地に植木が並べられたり、オフィスに花を届け水槽で熱帯魚を飼ったりしますが、これらも、生活環境に、無意識のうちに緑や水を取り入れようとする心理が働いているものと考えられます。とくに旅先では、日常生活のしがらみから解放されるという面もありますし、日常生活圏内とは異なる多様な自然にふれられる機会でもあるので、日常生活の場合以上に、プラスの効果が期待される

のです。私たちは緑や水に無意識のうちに引き寄せられますし（写真2）、リゾート施設の多くが自然に恵まれた立地にあることも、私たちが緑と水を求める心理が「遺伝子に組み込まれている」ものと考えれば、理解しやすいのではないのでしょうか。

こうしてみると、とくに四季の表情豊かな日本に暮らす私たちにとって、子どもの頃に遊んだ自然に懐かしさを感じるだけでなく、私たちはもっと根源的な部分でも自然を求めているのかもしれない。自然を求める心理は、文明を追いかけて急変した社会に生きる私たちにとって、無意識のうちにみられる“揺り戻し現象”といえるでしょう。

## ⑤ 五感を呼び覚ます旅： スローツーリズム

次に、私自身の経験をもとに、自然の旅の魅力について、やや違った視点から考えてみましょう。

2015年の夏、私は2週間かけて、イギリスのカントリーサイドを一人で歩きました。場所はロンドンの西方、大学で有名なオックスフォードの西側に広がる丘陵地帯です。コッツウォルズと呼ばれているこの地域は、特別自然美観地域に指定されていて、イメージどおりのイギリスの美しい田園風景が維持されていることで知られています。

歩くことをこよなく愛する人が多いイギリスには、公的に整備された“歩くための道”が、まさに毛細血管のように張りめぐらされています。それら

はフットパスと呼ばれています。コッツウォルド・ウェイは、国が指定する長距離フットパス＝ロングトレイルの一つで、北はシェイクスピアの町ストラトフォードに近い小さな村から、南はかつて最先端の社交の場として隆盛を極めた温泉リゾート、バースまで約160kmにわたっています。なだらかな丘陵地帯が続き、ロンドンからも遠くないために、イギリス人や外国人に、もっとも人気があるロングトレイルのひとつです。

コッツウォルド・ウェイは、早く歩けば1週間以内に歩き通すこともできるのですが、私は北の起点となる魅力的な村、チップینگカムデンからバースまで、毎日10～15km位のスローペースで、ゆったりと移り変わる風景を楽しみながら南下しました。かつて羊毛の大生産地だった地域のため今でも牧畜が有名で、牧場を横切ることも多く、歩く途中で出会うのは人よりも圧倒的に羊や牛です（写真3）。時折出会うウォーカーたちは、一人で黙々と歩く人、小さな子どもを連れた家族、手を



写真3 コッツウォルド・ウェイ

とりながら歩く老夫婦、そして仲間数人と連れだって歩く若者たちなどさまざままで、なだらかな丘や牧場、森の中、そして点在する個性的な村々を、皆思い思いのペースで歩くのです。眺めの良い場所で寝転んでひと時を過ごしたり、反対方向から来たウォーカーと情報を交換し合ったり、近隣の住民たちも犬の散歩を楽しんだりします。時折降るシャワーのような雨も長続きせず、湿度が低いので、雨があがれば蒸し暑さを感じずに歩けます。森を抜けると突然見渡す限りの丘陵や花畑が広がり、麦畑ではヒバリの鳴き声が響き渡り、遠くから汽車の走る音も時折聞こえてきます。多忙な生活を送っている

と、遠くを眺めたり遠くから聞こえる音に耳を澄ませるような機会も忘れてしまいがちですが、自ずとそうした感覚が呼び覚まされます。日常の雑事が些細なことに感じられ、思考の視野も広がることを実感した、なんとも贅沢な時間でした。

また、イギリスには運河が多くみられます。産業革命時代に原材料や製品の輸送用に重要な手段であった運河を復活させて活用している場合が多いのですが、その運河を数週間かけ、カナルボートと呼ばれる細長いボートを借りてのんびりと旅することが、イギリス人の夏の休暇の過ごし方として、とても人気が高いのです。私はほんの



写真4：カナルボートで休暇を楽しむ人たち

短時間のカナルボートしか体験したことはありませんが、それでも木漏れ日の中をゆったりと移動しながら兩岸に遊ぶ水鳥を水面に近い目線から眺めたり、運河沿いで憩う人たちを眺めるのは、新鮮で爽快な時間でした(写真4)。いずれ家族や友人たちと、ゆったりとした運河の旅を楽しみたいと思っています。

移動手段は、スピードがアップするとともに私たちの感覚と離れていきます。現地の環境や人びとと、もっとも密度の濃いコミュニケーションがとれるのは、感覚がもっとも鋭敏な等身大の移動である“歩くこと”であり、ボートで移動するような、ゆったりとした移動手段なのです。

こうした時間をかけて移動のプロセスを楽しむ旅のスタイルは、スローツーリズムと呼ばれています。移動のスピードを落とすことで見えてくるもの、感じられることはたくさんあります。ゆったりとした移動だからこそ、木漏れ日や風のせせらぎを感じ、道端の小さな花の美しさに気づき、時折聞こえてくる鳥のさえずりに耳を澄ませることができるのです。

## ⑥ おわりに

自然は私たちの五感を呼び覚まし、心も体もリラックスした状態にしてくれます。それだけではなく、自然の中では仲間や出会った人たちと自ずと会話がはずむので交流の場となりますし、一人で歩けば日常生活では近視眼的になりがちな思考の地平が広がり、自分を見つめ直す思索の場ともなります。このように、自然を求める旅は、時代を越えて認められる私たちの基本的な動機のそれぞれにかかわるのです。日本でも近年、北根室ランチュウェイや信越トレイル、九州のオルレなど、自然を楽しめる長距離トレイルが急速に整備されてきています。それにエコツーリズムが注目されるようになった背景にも、24時間休むことないサービス社会・グローバル社会を支える人が増えつつある中で、私たちの旅する“ころ”が、今まで以上に自然を求める時代となっていることがあるものと思われれます。自然環境に浸りながらリラックスした気分で豊かな時間を楽しむ旅は、これからもますます人びとを惹きつけてやまないことでしょう。

### 参考文献

- 1) 寺島実郎：新・観光立国論、NHK出版(2015)
- 2) H.P. Gray：International Travel-International Trade, Heath Lexington Books(1970)
- 3) 武井裕之・渡辺貴介・安島博幸・天野光一：明治・江戸期における温泉地の長期滞在の構造に関する研究、都市計画論文集、第24巻、pp.385-390(1989)
- 4) 橋本俊哉：自然志向ツーリズム、小口孝司編、観光の社会心理学、北大路書房、pp.153-166(2006)
- 5) 河合雅雄：子どもと自然、岩波書店(1990)
- 6) 橋本俊哉：江戸庶民の行動文化、交流文化、第7巻、pp.24-29(2008)